

平成 28 年度第 1 回鶴岡市地域コミュニティ活性化推進委員会 会議録

- 日 時 平成 28 年 9 月 30 日（金）午後 3 時～午後 5 時
- 会 場 鶴岡市第三学区コミュニティセンター大ホール
- 委員出席者 鶴岡市地域コミュニティ活性化推進委員会委員 12 名
（名簿資料【0-0】のとおり）
- 市側出席者 市民部長ほか鶴岡市地域コミュニティ活性化推進委員会幹事、事務局 27 名
（名簿資料【0-1】のとおり）
- 公開・非公開の別 公開
- 傍聴者の人数 0 人

（午後 3 時 開会）

1 開 会 （進行：コミュニティ推進課長）

2 挨 拶 （市民部長）

3 副委員長の選出について

齋藤 建委員を副委員長に選出

4 意見交換等

（事務局）資料 1～3 により事務局説明

（委員長）今事務局からコミュニティ推進計画の進捗状況、それからキーパーソンとなり得る地区担当職員と生涯学習推進員について、それぞれの地域で様々な活動実績と課題、両方があるという事を報告いただいた。今日は何かを決めるという事ではなく、皆さんからそれぞれご自分の住んでいらっしゃる地域とか、ご自分の活動のフィールドの視点から状況や課題等を出していただき、自由に意見交換できればと思っている。

（H委員）地域で集落支援員そのものの理解が得られていないと思う。また、私自身も生涯学習推進員だが、その立ち位置がはっきりしていないため、いまだ地域で自分が思い描く活動ができていないことが不満に思うところである。生涯学習推進員としての活動ではないが、私は、昨年からブナの木を植える活動をしている。本当は、10 歳の子どもたちから活動してもらいたいと思っている。それは、子どもが自然と関わり合い、自分が植えたブナが成樹になり、ブナの成長とともに自分も還暦を迎えるというドラマを描いている。これは、子どもの教育、人間としての教育、生涯学習、森林文化都市という観点からも非常に素晴らしい事業だと思い組みませてもらっている。このような事業を生涯学習推進員としてやりたいと思っていたし、鶴岡市全域で展開していただければありがたい。

（委員長）地区担当職員あるいは集落支援員の理解、ご本人だけでなく周り或いはその方々が何かをしようという時に敬遠される環境とか土壌、それから生涯学習推進員の立ち位置

についても本人も周りもあまりはっきりしないというところが課題だという点について、共感される方も大変多いのではないかと思うがいかがか。

(G委員) コミュニティ推進計画を策定している段階から、生涯学習推進員については期待されているかなと感じていたが、自分自身、期待されるほどの活動は出来ていないと思っている。ただH委員と同じように、地域において生涯学習推進員として、私が出来ることは何かと考えている。成人している人たちは、考え方が大体できているので、私は子どもたちにアプローチし、子どもたちが地域を好きになり、将来地域で活躍してくれることを願っている。先日、千葉大学名誉教授の明石先生のお話をお聞きし、子どもたちがいずれはその地域から離れていくかもしれないが、この鶴岡市が好きだという思いを持ってもらいたい、その思いがあれば、いずれ戻って来るかもしれないし、たとえ戻って来ないとしても、周りの人に鶴岡の良さを伝えてくれれば良いと改めて思った。

子どもたちの郷土愛を育むために、私は、子どもたちに地域を知ってもらおうと、一昨年にまち探検を実施し、第一学区のダルマ堂等の見学や歴史等について、地域の方のお話を聞く機会を作った。今年度は、善宝寺が御開帳ということで児童館の子どもたちを連れて行き、大般若をやっているところの見学や経典に触れる体験をすることでお寺に興味を持つ子どもがいた。第一学区は、良い子を育てる地域推進事業をやっており、今年6月に当学区のコミュニティ振興会長の発案で、僕たち、私たちの町を知ろうという目的で、学区の小学校の3年生に町内会長や民生児童委員の役割やコミセンの仕事について説明した。子どもたちが地域行事にも興味を持ってくれれば良いと思っている。また大人向けに鶴南大学を実施している。読み聞かせのように親子で参加する機会を作るなど、子どもが地域活動に取り組むよう工夫をすることで子どもも地域への愛着が生まれるのではないか。地域の中では、生涯学習推進員の「生涯」を障害者の「障害」と捉える人もおり、その役割も含めまだ、理解されていないと感じている。みなさんに理解してもらえたら有難い。

(委員長) 生涯学習推進員についてのお話だったが、関連または他のことでもいかがか。大体、共通の認識だと思う。

(J委員) 年齢制限のない女子会に所属し、色々な地域イベントに関わっており、そこに注ぐエネルギーもかなりのもの。行政の方からも応援いただいているが、地域は、少子高齢化が進み今後の協力体制について不安を抱いている。9月11日開催された海づくり大会に天皇陛下がお見えになり、改めて自分たちは、自然に囲まれ山から海と自然の恵みを受け生活していることに感謝した。地域全体を見ると、子どもたちのイベントに特に力を入れていると感じる。地域の中で川遊びや、流しそうめん、プロレスなどイベントが多く企画され、ものすごい人が動いている。鼠ヶ関では、先日、駅前の空き店舗を活用し、秋の鱒を売りにしたイベントを行ったところ大盛況だった。多くの方から来ていただくのは大変嬉しいことだが、スタッフとして応援隊が欲しいと思った。10月2日は、地元の神社下で「おもてなし」イベントする。温海温泉でゆっくりしていったというイベントだが、そこに携わる人たちは数多いイベントに関わり、本当に休みなしの大変な状況だが、みなさんに「おもてなし」をしたいという気持ちで頑張っている。体力的にどこまで続くのかなという状況である。空き店舗や家がどんどん壊されており、

心配な面もあるが、この会議はみなさんの動きや各集落の動きがわかり、山の信仰、海の信仰、善宝寺など人々が大事にしているものが見え、広く庄内も含めきっと良くなるだろうという思いになる。今、温海温泉では、カップルや熟年層の二人で歩いている人が目立つ。男性同士、女性同士もおり、温泉街を歩く人が増えてきている。歩いている人に声掛けをしており、外国の人にも「ハロー」や「ハイ」しか言えないが声掛けしている。それでも気持ちは通じていると思っている。人に対して、自分がどう対応できるか、受け止められるものがあるのかと考えながら行動している。きっと自分の地域も前向きな地域になってくれるのではないかと、また、広域的にも一つになることを希望している。

(委員長) 自分の住んでいる身近な地区や学区、集落単位での活動に目が行きがちだが、鶴岡、庄内というもう少し広い視野での色々な取組の連携という視点は、コミュニティとしても大事という意見を出していただいたと感じた。コミュニティ推進計画に基づいて各地区で地域ビジョンを策定しようという事になっているが、温海地域は集落ごとに集落ビジョンを策定されたとのこと。イベントなど一生懸命頑張っている方々がその策定に関わり意見を出すなどの繋がりがあるのか。

(J委員) 特に地域ビジョンとの繋がりはないが、各地域のイベントに足を運ぶようにしている。自分の守備範囲だけでなく、おかげ様の気持ちで皆が協力することは、私が所属する会では普通のことになっている。活動の範囲も鼠ヶ関、遊佐など広範囲となっている。

(委員長) 速やかに行動し、メンバーといっしょに交流を増やし活動していることがよくわかる。地域ビジョンに関連した質問をさせていただきたいが、それ以外でも皆様からご発言いただきたい。

(C委員) 地域ビジョンの話で、大鳥は4年前に集落対策事業として年間150万円×3年間で450万円の助成金を使い様々な事業に取り組んだ。それが終わり、その後どうなったかというのが今の話にすごく通じると思う。ビジョンを打ち立てたが、日常生活の中でそれが意識されているか、若しくは具体的な行動に落とし込まれているかという視点に立つと、掲げたビジョンや文言は何だったかなというレベルだと私は思う。その目的や文言を含め、多くのものは過ぎ去った過去のものになっているかなというのが実態であり現実と思う。取組として、お茶のみサロンやタキタロウ調査をしたり、除雪が大変なので除雪機械を集落単位でリースし、3年間分で払い下げするなどハード整備も行った。資料を見て思うが、ビジョンを作ろう、普及活動をしよう、それに基づく取組に助成金を付けるという3点セットは、集落対策事業と同じだと思うが、果たしてそれで本当に後々のものに全てつながり得るか少し考えるところがあると話を聞いて思った。個人単位や集団でやるとなかなかこういうケースは難しく、容易で失敗がないことをやろう、イベントをやろうとかになりがち。イベントも事あるごとに駆り出され、声を掛けられたから行かなければならないなど、普段の付き合いもあり、それも合理的な村の中での、社会の中での一つの出来事なので、ものによっては参加しなければいけないなど。日常生活がすごく忙しく過ごしている中で苦しくなっていく事業、自分自身が苦しくなっていく、だけでも事実として

積み上がっていくみたいな事もあるし、とても難しいが私個人としては、ビジョンは掲げてもらって構わないし、そういう形となることも大事だなと思っている。自分の目先よりもちょっと頑張ったら出来そうみたいな事に取り組み、少しずつステップアップしていく。小さな成功が積み重なっていくと内々の心の部分で元気になっていくと思う。しかし、その後何もしなくなればまた元に戻るのかといったらその辺はわからないが、そういうものも矢継ぎ早に見ていくことは大切と思うし、コミュニティはこれをやったからおしまいというものではないと思う。

(委員長) 全く賛成で、何のためのビジョンなのか、あるいはどういう風に使うかといった所が重要だと思う。

(I 委員) 初めて参加する。私の住んでいるところは、自然豊かでいいところだが、観光面では何もない。地区は6集落あり昨年の4月から広域の地域活動センターがスタートしている。敬老会や夏まつりなどいろんなイベントをやって人を集めようと各集落から何人か集まって企画会議を開催し、敬老会のアトラクションもなるべく地元の人や子どもたちから参加してもらえばもっと楽しくなるのではないかなど、よりよい内容を検討し事業を実施している。私も理事として関わっているが、女性の役員が少ないと感じている。例えば敬老会など単発で実行委員会形式の事業には女の人が出てくるが、いざ何かの役員となると女性が少ない。40~50代の女性や10代くらいの女の子が入ればもっと活発な別の意見が出てくるのではないかなと思う。私自身は婦人会もやっており、40代くらいの人たちや10代くらいの子どものたちを巻き込んでいろんな事をやりたいと思うが、なかなか乗ってくれる人が少ない。周りには、「やろう」と言ってくれる方は結構いるが、いっしょにやるという人が少ない。各集落の集まりなどに出ると、地域の人的資源を知ることができ、改めて地域の良さを感じることができた。小学校は統合により地域には無くなったが、その跡地を地区の活動センターとして使用することで交渉中。地域の中では、これまで行ってきた、子どもたちの宿泊体験を継続して行っている。子どもたち自身も楽しみにしており、とても良いことだと思う。先日の家庭教育の明石先生からも子どもの体験不足のお話があり、地域の大人が、子どもたちに色々なことを体験させ、もっと地域を好きになってもらえたらいいかなと思う。私の一番の望みは女性の役員をもっと増やしたいこと。

(委員長) おそらく全地域に共通することで、女性や若い人と一緒にやることが実現できないために、頑張っているのに次に続かないという課題が出ていると思う。そのあたりを巻き込むのにコミュニティ推進計画で言っている地域ビジョンの策定はじめ、いろいろなことが使えるのかどうか、今試されているかなと感じている。今までの話を伺っていて、地域それぞれ特性があるがこのコミュニティ推進計画を進めるにあたり、今日は、地域ビジョンと地区担当職員と生涯学習推進員がキーワードとして挙がっている。

(O 委員) 私の住んでいる地区は12の町があり町内会が24ある。一町に4つの町内会があるところが3つ、3つの町内会があるところが1つ、そして、2つ町内会があるところがあり、町内会は、小規模な町内会から約500世帯もある大規模な町内会がありその差が大きい。中心部は古くからの町で、住宅地と商店街で形成されている。人も多く、元々活力

があり、中身のある活動をいっぱいしている町内会もあるが、一町に3・4つもある町内会では、世帯が60~70軒くらいの町内会があり、その中には、大部分が勤め人で、しかも近年は勤務形態が変則で土・日であっても、地域にそれほど人はいないという中でどうやって町内という一つの単位を活性化させていくかが悩みの種になっている。そこで、小学校に出向き子どもたちから、2年生は福祉活動に参加してもらい、3年生は、町内会とか地域の事を知ってもらい活動をしている。中学生からは防災訓練に参加してもらい、ゆくゆくは小学校高学年も避難訓練に参加してもらい、人を助ける部隊を担ってもらおうと考え、ボランティア活動も夏・冬やってもらっている。如何せん子どもの3分の2は新興住宅街に集中しており、うちの町内会は60軒あるが、子どもは7世帯9人で中学生は一人もいない。そういうアンバランスな中でどうやって、ビジョンにあるような町づくりをしていけるのかというのが非常に頭を悩ませる課題の一つである。ただ、うちの町内会には、総会と夏まつりとその関連の会議はお寺でやり、役員会1回は私の家でやっている。その他、お茶のみサロンは寿司屋の2階でやっている。普段からの繋がり自体が大変薄くなっていて、2、3年前までは15~16人来ていたのが今は10人となっている。それぞれの地区にそれぞれの課題があるかと思うが突破口は、とにかく若い人が町の活動に参加する機運を作りたい。それで若い人は全員総務部員で、町内の2軒に1軒役員をしてもらい、役員手当を些少だが出している。もっと何とかならないものかという焦りや、腹の中では煮えくり返るような事もあるが、表に出さないように、また、少し長い目で、もう少しうまくやれないかと模索中である。

(M委員) 自分の地域では、新しい計画を立てて何かやろうというより、今までやってきたことをどう守っていこうかという方向である。地域には5つの組織があり、全て同じ人たちが関わっていることもあり物事が早くまとまる。今、主になっているふるさと村の運営委員の方が公民館とタイアップする形で協力し合い活動している。若い人が少なくなり、町のスポーツレクリエーションや体育祭に地域単独のチームが作れず、他の地域に混ぜてもらい参加している状況。「そば」は、70歳以上のおばあちゃんたちが主力で、若い人たちが手伝っているが、そのおばあちゃんたちが居なくなったらどうなるかと心配である。地域にある程度、強引に人を引っ張り込んでいかないと運営出来ないのが現状である。神社の祭りでも若い人は忙しく出てくるのはお年寄り。今、いる人でどうやって守っていくのか、地域コミュニティを考える上で、一番ひしひしと感じているところ。自分の子どもを家に引き寄せた。人が増えると家も明るくなった。地域も同じことだと思う。自分の地域で、これまでやってきたことをどうやって維持していくか考え、いい結果が出ればこれに則ったビジョンが生まれると思う。

(委員長) キーワードは、どう守っていくか維持していくか、ビジョン策定にかかるころも、そういう発想が大きいのではないか。そういう意味では地域福祉の視点も同じなのかなと思う。

(K委員) 生涯学習推進員の活動内容に社会教育、生涯学習推進事業の企画立案とあるが、社会教育と生涯学習の基本的なところを教えてください。

(委員長) 全国的に議論されているところだが、事務局に説明を求める。

(事務局：コミュニティ推進課長) 生涯学習は地域において学習するという特性があり、それから外れる学校との関係で子どもの教育クラブや社会教育があると理解している。

(幹事：社会教育課長) 私の考えるところでは、生涯学習とは一生勉強が必要という中で、個人のその能力と向上心を満たす、個人的な資質を高める個人の関心をもとに行っていく部分が大いと思う。社会教育は、社会全体が個人の学びによりフィードバックを受ける、それが地域社会であったり、もっと大きな社会の枠組みかもしれないが、それにより、社会全体が一步前進する。または、社会全体の底上げにつながっていくと私は理解している。

(委員長) 私もそういう認識でいる。文科省の色々な制度上の区分けというのもあると思うが説明いただいたとおりと思う。

(K委員) 地域福祉を進める上で社会福祉協議会の地域福祉課が地域に入り、課題提供したり、活動を促したりということをやっていくわけだが、社会教育、生涯学習とのリンクが無いと感じている。個人的なものというより、地域の中の一員としてどう含まれるか、それを呼びかけをするところが今無い。地域の為だから仕方ないと地域の中に参画していくことを住民の方々に促していくようなことは、これまでなかなか無かったのかなと思ひ、これから期待をしたい。社会福祉協議会は、地域福祉の為にという形でやってきたが、これからは様々な問題、困難なケースが増えてくると、結局、そちらの方向に関わらなければならない、軸足を動かしていかなければならない。地域の中に入り、「これはやっぱり地域の一員としてやらなければならないことだ！」と呼びかける人が出にくくなっている。ここは是非、福祉分野に限らず、地区担当職員や集落支援員の方々もそうした視点を持ち地域の中に入り促してもらえたら有難い。また、住民の方々から状況をしっかり押さえてもらわなければならないと思っている。この議論も例えば少子高齢化、人口減少であれば、それはどういう状況になっているのかという事をきちっと住民の方々若しくは地域に提示をしなければならぬだろう。例えば学区に入るのだとすれば、町内会ごと、もしくは学区ごとに人口がどう動いたかとか、5歳刻みの年齢人口がどういうふうに動いていくのか、それを例えば平成17年、22年、27年というように国勢調査の数字をもとに提示をすることによって自分たちの町とか学区がどう動いてきてこれからどっちに向うのか、これは非常に厳しい数字になる。例えば平成17年度と平成22年度を比較すると、学区の北側が増えて真ん中が減っているが、学区としてはほとんど変わらないからいいかと全く議論にならないという事になる。町内会、集落ごとに落とした数字が重要なので、今、「こうなっている。」と数字を提示して、現状をきちっと認識してもらう事が必要だと思う。地域を守る、自分たちの自治を守るために参加をしなければならない。そういう意識付けをしていかなければならないと思う。平成27年の国勢調査はそろそろ細かい数字が出てくると思うので、地域に入りビジョン策定を仕掛けていく際の資料として活用をしていただきたい。

(委員長) 社会教育の重要性というのは多分理解はされているだろうと思うが、そこまでの

事業が十分に広められているかどうかというのが、K委員の問題提起、課題のとおりと思う。行政施策的には今全国どこでも社会教育への予算が全くつかないような状況で、それをどうやって運営していくのかも課題としてあると思う。K委員と大体同じような認識で、みなさんも同じだと思うが、入口は例えば、温海の駅前にもっと人が来てほしいとか、或いは何か楽しいイベントをやろうというきっかけだったりとか、或いは本当に元気がなくなってきてみんなで盛りあげようとふるさと村を立ち上げたり、或いは第一学区でやっているように孤立とか孤独死とかなくそうとか防災であったり、切り口は色々だと思うが、結局やる事は一緒になってくる。やる人が同じなので入口は多様だけでも最終形はみんな一緒みたいなそんなイメージを最近私は持っている。やり方は様々だが、結局、一人ひとりの意識や、或いはどこまで共同生活という事に理解があるかという事になってくるのかという意味では、K委員のご提案のとおり、土台となる社会教育の部分が大事なのかと改めて思う。後半の方は大変手前味噌だが、実は第一学区さんの誰も孤立させない絆づくりプロジェクトでは、まず学区の方から、町内会ごとあまりに多様なのできちんと町内会ごとの現状と推計を出して欲しいと言われて、町内会ごとの厳しい推計を出ささせていただき課題意識からやってみた。全住民には共有されていないと思うが、ある程度信頼関係があり、やる気がある所だと動機付けになるが、あまりやる気がない所は、見せられるともっと暗い気持ちになるかなと難しいが、地域のデータを知っているという事はきちんと現状を見つめるという大変重要なことだと思う。

(E委員) NPOも法律が出来て20年目になり、5万団体という多くの組織がいろいろ出てきたが、近年どんどん減少傾向にあり、そろそろNPOの時代が終わるのではという噂が出ており、組織ではもう新しい時代に対応できなくなるのではないかということで、いろんな動きが出ている。特に地方創生絡みの全国的な動きの中に業務が巻き込まれており、そういう状態の中で淘汰されるのがどんどん出てくるだろうという事で、今までは行政頼みで行政の支援を受けて補助金等を受けてやっていた団体が真っ先に消えてなくなるだろうという予測があり、その中で新しい動きとして、アメリカで色々な成功事例が出ている、コレクティブインパクトというシステムである。要はある問題や課題があった時に、その課題に関係者集まれとの呼び掛けに集まった人たちで、その課題を解決していく手法であり、誰が責任を取って誰が代表かというのがなく、自己責任でやっていくという考え方で「大丈夫なのか。」と不安に思ったが、どんどん成功事例が出てきているという。最近の事例で、山王商店街で屋外で上映会をやりたいという連中が現れ「そんなことできるわけない」と我々鼻で笑っていたが、クラウドファンディングという手法を取り入れ、全国から資金を集め、東京からも30人位来てついに上映会をやったということ。資金調達は25日間で80万円を目標としていたが、最終的に120万円近く集まった。組織だと事業をするとすると理事会を開催して、何して、こうしてと実行まで時間がかかるが、クラウドファンディングの手法を使うと短期間で実行できるという新しい動きを見せられた。組織の中でも、やり方、運営の仕方が変わってくるのではないかという考えに立っている。我々のNPOで11月16日、「きらりよしじま」の高橋由和さんから来ていただくことになっている。高橋さんは、今内閣府の委員と、総務省の委員もやられているようで、今では西の「やねだん」、東の「きらり」と言われるくらい有名になっており、当日は、専門家向けに、総務省で何が起きているかをお話ししていただく予定でいる。行政の方から

も来ていただけると有難い。

(委員長) コレクティブインパクト、要は先ほど何かイベントをやる時に応援隊が欲しいと言っていたような事とも重なると思う。「この指とまれ」方式もあるというご紹介だった。

(D委員) 鶴岡市の地域コミュニティ推進計画は、とても難しいといつも思っている。先ほど委員からも発言があったように、無理してやるのではなく、今やっていることを継続するのが精いっぱいなのかなと思っている。私も生涯学習推進員を19年やっているが、地域では10年以上生涯学習推進員をやっている方がほとんどで、新しい方に交代したいが出来ないという状況もある。本来ならば2年任期なので2年で交代できれば、より多くの方が生涯学習推進員をすることにより、いろんな経験が出来、地域の事も分かっていくのかなと思っている。鶴岡市地域コミュニティ基本方針の基本理念として「市民がまちづくりの主役として個性あふれ豊かさを実感できる地域社会を築く地域コミュニティの構築」とあり、推進計画に目指す5年後の方向性というものもあるが、とりあえず今できることをやっていくしかないのかなと思っている。当然方向性や計画は必要ではあると思うが、あまり無理の無いように、個人に負担の無いようなやり方ができればよいと思う。

(A委員) 初めて参加させていただく。みなさんの意見を伺って非常に多様な状況があり、合併した6つの旧市町村、海あり山あり、町がありという多様な上に、その旧市町村ごとの似たような施策というようなことも重なりあり、市役所の皆さんや武田先生が入って苦労して取りまとめられていると思った。一つ質問があるが、地域ビジョンは、そもそもどういう単位で作ると想定したものなのか教えていただきたい。

(委員長) 広域も単位も想定しているという答えだが、事務局からも説明願いたい。

(事務局) 委員長からお答えいただいたとおり、広域組織も単位組織もどちらも想定している。櫛引と温海地域には広域のコミュニティ組織がないので集落単位での取組になる。

(A委員) 先ほど、コレクティブインパクトのお話があり、初めてその言葉を聞いたが、それに近いかなと思う、コレクティブアクション理論を少し研究しているので話をさせていただく。コレクティブアクション理論とは日本語で中央行為論という風と呼ばれており、或いはコモンズ論と呼ばれている。コモンズというのは、森林で言えば、共有林、みんなが持っている森林、日本の場合は入会(いりあい)林或いは部落有林と呼ばれていた様な森林。その森林以外にも水利や水を利用するのに共同で管理する必要があったとか、それから漁場も大抵は集落の人たちがみんな管理することとして使うという事で、これは非常に有名になった研究ですが、世界中の共有の資源をどうやって利用したらうまく管理できるか、そういう事に関心を持った研究者集団がおり、世界中の数百、数千の共有資源をどうやって利用したら資源を劣化させずにうまく利用できるかという研究をした。その結果わかったことが非常に単純なのですが、自分たちのことを自分たちで決める集団がどの地でも上手く管理できるという事がわかった。それは例えば何か資源を利用するためにルールを決めるという時に、ルールを決めるのは例えば市役所や県などの行政がルールを決め

るのではなく、そのルールを決めたことによって影響を被る人たち、もしそのルールがうまくいかなくても、うまくいったとしてもその結果を受け止めざるを得なければいけない人たちがそのルールを決めるということが一番うまくいくということが分かったというのがこのコレクティブアクション理論とか或いはコモンズ論の一番の成果だという風に言われている研究で、今日非常に多様な問題がそれぞれにあるという事がわかったので、ちょっと関係するのかもしれないということで紹介させていただいた。

(委員長) この時間帯に相応しいまとめのようなお話と貴重な情報をいただいた。A委員もお感じのとおりどうやってまとめるといってもどう進めるのかというのが難しいこの施策分野に対してみなさんから是非忌憚のない意見をいただきたい。全体的にみなさんから一言ずつはいただいたので、何か委員の意見に対してなど、もう少し質問したい事はないか。

(J委員) O委員から先ほど地域の子どもの育て方について教えていただいたが、小さい子どもたちがどのくらいの時期に、防災面で人を助けたいと思うようになるのか、お年寄りのためという思いやりの心や、その縁づくりというのが大切だと気付かせていただいた。それとA委員より森林を例にお話しいただいたが、自然に関するものすべてのことか。そのことから自分のことを見ていくということなのか。もう少しわかりやすく教えていただきたい。

(A委員) 例えば共有林とか漁場の管理とか、あるグループ何十人とか或いは何百人くらいのレベルの、個人が管理するのではなく、日本だと集落等で結成された集団が管理している資源を一番うまく使っていた、持続的に使っていたケースと、それが資源を枯渇させてしまったケースに分けて持続的に使ったケースは先ほど言ったようなこと。

(J委員) 例えば、山であったら森林組合とか、そういう意味ではなくて共有のものをみんなでもっといいものにできないかという話か。

(A委員) 森林組合は、個人の山を持っている人たちの組合だが、その森林組合よりもっと小さいもので、集落だと多分多くの場合共有林とか入会林を持っている所が多いと思うが、そういう市民グループをいう。

(委員長) A委員のお話に大変興味を持たれたようだが、後ほどまた皆で学びたいと思う。私から地区担当職員のことでも最後に質問させていただきたい。基本的に地区担当職員の役割や業務の規程があるのか、どういう形で共有されているか確認したい。また、地区担当職員 258 名全員を対象とした研修があるか伺いたい。一点目を質問した理由は、第一学区の防災訓練には 200 人位の参加があり、社会福祉協議会、包括支援センターの職員も参加しているのだが、今年、地区担当職員の参加が一人もなかった。昨年は参加があったので残念に思った。地区担当職員とそれぞれの地域特性、どのような方法で関わっているかいろいろ違うとは思いますが 2 点を質問させていただく。

(事務局) 地区担当職員は、班長が各地区、地域に1人、それに班員が規模に応じてだが2人から3人いて活動をしている。6つの地域で取組み方は違うかもしれないが、地域ごとに班長会議を開催し取組について共有した後で、班長がそれぞれの担当地区に出向き、顔合わせを兼ねながら今年度の活動の道筋をつける。その後、地区からの要請を受け、班長が班員に呼び掛けて活動している。研修については毎年しており、今年度は5月にはファシリテーション研修を職員課とコミュニティ推進課が共催で実施した。また、12月にも研修を実施する予定であり、内容についてはこれから検討する。また、研修は、出来るだけ多くの職員が同じ研修を受けられるように、午前、午後に分けてやるとか、複数回開催するなど工夫をしながらやっていく予定。

地区担当職員の役割と業務に関する規定については、地区担当職員設置要綱があり、その目的として、市と行政とのパイプ役として地域の方に入っていき、具体的には地区担当職員自らが地域の状況を把握していくこと、住民のみなさんと情報、課題を共有していくように努めること、併せて市からの行政の情報提供を地域にしていくといったようなことが共通事項として定められている。そして、地域ごとに区域、人数、活動についてはそれぞれで決めて入っているといった状況である。

(G委員) この推進計画が出来上がり、地域においてこの計画を浸透させるために、進めるためには何を期待されているか私にはわからないところがある。たぶんそれを今答えていただくのは難しいと思うが、私は、自分が出来ることをできる範囲でやっていくという事で良いのではないかと思っているがいかがか。

(委員長) この会議は今年度2回開催し、推進計画の進捗状況について気づいた点をお話いただくことでいかがか。

(事務局) 推進計画の推進についてというご主旨かと思うが、計画の冊子が出来上がり、みなさまの他に基本的には町内会長さんなどの単位自治組織へ1冊基本的にお送りしており、まずは各地域で何かの機会を設けていただき、それを材料にお話しいただくという事を狙っている。皆様方におかれても地域で何かお集まりの際に推進計画をネタに、自分たちの周りがどうなっているのか、これに向けて何か考えられることがないとか様々話し合いをしていただければという風に考えている。なお、市の職員の方でも地区担当職員が冊子を手に入れたら地区に入っていきというイメージで考えているのでその時も併せて一緒にお力を貸していただきたい。

(委員長) 委員からもお話があった通り全体的にまとめようがないが、コミュニティ活性化推進委員会も推進計画も意味あるものだと考えている。それらを意味あるものにするためには、まず現状維持というか自分たちの生活、暮らしを守ることが最優先だと思うが、守るために何か新しいことをしていかなければならない状況になっているという事をみんなでちょっと考え、一番大事なのは、これをきっかけに女性や若い人たちも含めた会話の機会が増え、一緒に考えたり話し合ったり、小さな成功体験を作ったりということが進めば計画の目標は達成できるのかなと思う。その時に福祉や社会教育、或いは住民自治組織とかいろんな組織が連携できるかどうか。地域は一つで、一体的にやる時に

この計画が使えるかどうかというところがおそらく鍵なのかなと思う。使える地域と使えない地域が正直出てきてしまうと思うが、ツールとして使っていけばいいのかなと個人的には考えている。意見交換は以上にさせていただいてよろしいか。

(3) その他ということで、私から資料を配布させていただいたが、これからは、行政だろうが、NPOだろうが、一住民だろうが、みんながもっと自分以外のことも考えたり、対話が出来たり、対話は話すだけでなく聞くということも大切なので、聞ける人も含め、コーディネーション出来る人がいればいいなと思い、人材育成に取り組んでいる。今年度、鶴岡市からもご支援いただき、大変すばらしいメンバーが庄内全域で育っている。この取組は来年度も続けるので、皆様からもご参加、ご活用いただければと思っている。それでは、以上でマイクを事務局にお返しする。

(事務局) 委員長ありがとうございました。皆さんからも活発なご発言、ご意見を頂戴し感謝申し上げます。今後の予定で、10月18日に「つるおかみらいフォーラム」と題し、北海道教育大学の廣瀬隆人先生からおいでいただき、ご講演と住民自治組織の事例発表を予定している。ご都合のつく方はぜひご参加いただきたい。また、次回の委員会については、来年2月頃を予定しているのでよろしくお願ひしたい。

以上、第1回鶴岡市地域コミュニティ活性化推進委員会を閉会する。